

## 本論 〈孫文革命〉の展開と中国国民党の形成

### 第1章 〈孫文革命〉の起源－興中会の成立と運動発生過程

はじめに

革命運動の「起源」を探求する場合、その二重の意味を考慮する必要があると思われる。即ち、一つは運動を推進する主体となる革命団体の形式的な「成立」であり、いま一つは社会のある部分が次第に政治化することによって、漸進的に運動が発生していく「過程」である。そして、前者は後者の一段階として位置付けられよう。

〈孫文革命〉の場合、孫文による1894年11月24日のハワイ興中会の結成を、最初の革命団体の「成立」と見做すことは、現在ではほぼ定説となっているが<sup>1</sup>、これに対する批判・異論、即ち広東（香港・澳門を含む）を興中会「成立」の地点と見做す見解も、これまでに幾つか発表されている<sup>2</sup>。しかし、革命運動が発生して革命団体の「成立」に至った「過程」、あるいはその社会的背景に関しては、いずれの立場からも決して十分な検討が行なわれていない。換言すれば、興中会という組織自体に注目するあまり、その背景を成す当時の社会状況と革命運動との関係、即ち社会のどの様な部分が、どの様な条件・状況下で政治化し、革命運動が発生するに至ったのかという点には、あまり注意が払われていないのである。

そこで本章では、ハワイと広東における興中会の「成立」と運動発生過程の「過程」を巡る、様々な資料を整理・比較すると共に、その背景となった地域社会の状況をも考慮に入れることにより、〈孫文革命〉の起源に関する独自の立論を試みる。

#### 第1節 ハワイ<sup>3</sup>

##### (1) ハワイ「興中会」

まず、孫文が1894年11月から翌年1月にかけてハワイを訪れ、20人程の支持者から成る団体を結成し、それがやがて120人余りに増え、その会費（「会底銀」）や革命後に10倍の額を償還する債券（「股票」）の発行等によって、港幣約13000元（約6000米ドル）を集め、1895年の第1次広州蜂起の資金としたという経緯に関しては、従来も異論が無い<sup>4</sup>。そして、1890年代初頭から孫文の同志であった陳少白は、この時に孫文がハワイで興中会を結成したと後年に証言し<sup>5</sup>、また宋居仁・鄭照等は自身この時にハワイ興中会に加盟したと述懐している<sup>6</sup>。更に、ハワイから香港への帰途に横浜へ寄港した際、孫文が在住華僑の馮鏡如に興中会の章程を送って協力を求めたという、馮鏡如の息子である馮自由の証言も無視すべきではなかろう<sup>7</sup>。彼等が揃って虚偽を述べているとは、考えにくい。以上のことから、史上最初であったか否かはさておき、また「興中会」という名称が用いられたという確たる証拠は存在しないが、それと思しき団体がこの時にハワイで結成された可能性は、非常に高いと考えられる。

但し、その団体としての性質に関しては、やや問題が残る。即ち、従来も屢々指摘されている通り、「ハワイ興中会章程」には清朝打倒の意思を示す言辞は全く無く、これは当局の疑いを招くことを避けると同時に、華僑の危険を恐れる心理を考慮したためと解釈さ

れてきた<sup>8</sup>。また、「韃虜を駆除し、中華(国)を恢復し、合衆政府を創立する」という誓詞によって行なわれたという加盟儀式に関しても、上述の鄭照が誓詞には言及せず、宣誓が行われたという事実のみを証言している以外には、直接的証拠が無い<sup>9</sup>。しかし、孫文の兄の孫眉と鄧蔭南が資産を売却して多額の資金援助を行ない、宋居仁・鄧蔭南等の数人は自ら帰国して1895年の広州蜂起に参加していることから、少くとも主要会員は孫文と共に革命運動に参加するという、明確な意思を有していたものと思われる<sup>10</sup>。

## (2) 社会背景

しかしながら、ここで重要なのは、このハワイ「興中会」がハワイ華僑社会の内部から自発的に誕生したのではなく、あくまでも孫文の来訪によって初めて成立したものだということである。ハワイで数年間教育を受け、兄の孫眉が「マウイ王」と称される土地の有力者であったとはいえ、1883年以後は孫文の生活基盤はハワイではなく、香港・澳門・広州といった珠江三角洲地域に在った<sup>11</sup>。確かに、ハワイでこの団体が成立したことには、それなりの必然性が有る。即ち、ハワイでは1893年にアメリカ系勢力による革命が起き、ハワイ王朝が滅亡して共和政体が成立している。この革命が在住華僑に与えた影響は、従来も度々指摘されてきた共和主義の啓発という側面のみならず<sup>12</sup>、アメリカの進出によって本土の排華立法がハワイで施行されることに対する懸念という側面からも、考慮されるべきであろう<sup>13</sup>。即ち、自身の中国人としての立場が政治状況の影響を受けることを華僑が認識し、次第に政治化しつつあったと思われるのである。同年に商人・買弁やハワイ政府に勤務する華僑によって、学術研究・知識交換を目的とする「中西拓論会」が、程蔚南の経営する『隆記報』を拠点として結成されたのは、その反映であろう。そして、程蔚南・何寛を初めとして、翌年に創設された「興中会」の主要会員の殆どが、この団体に所属していたのである<sup>14</sup>。また、日清戦争の影響も無視し得ない。更に、その加盟者の大半が、三合会系統の洪門の会員であったとも言う<sup>15</sup>。これらの諸条件によって彼等が民族意識に覚醒し、血縁・地縁・階層等の差異を越えて団結することが可能になったものと思われる。しかし、たとえ中国のそれをも含めた政治状況一般に対する関心を高めつつあったとはいえ、まさに彼等は国外に在ったがために、中国政治の暴力的変革を目指す運動を自ら開始する直接的動機や利害関心を、必ずしも有してはいなかったと考えられる。彼等が、孫文という外来者による宣伝・動員の結果として初めて「興中会」を結成するに至ったのは、その表れであろう。

総じて言えば、ハワイ「興中会」が、その宗旨のみならず恒常的な指揮系統をも明文化した章程を持ち、政体変更を企図する革命を目的として結成された団体であったことは、ほぼ確実であろう。しかし、香港「興中会」の章程とは違って、ハワイ「興中会」のそれは3分の1が経費に関するものであり、故にこれはあくまでも革命運動の一部分としての、資金収集のために組織された団体に過ぎなかったと思われる<sup>16</sup>。しかも既述の通り、この団体は動員の主体であるよりは客体であった。故に、形式的な組織の「成立」ではなく、社会の政治化により革命運動が発生する「過程」に着目する限り、〈孫文革命〉の起源は、このハワイ「興中会」とは別の所に求めねばならないと考えられるのである。

## 第2節 広東<sup>17</sup>

### (1) 「四大寇」と「輔仁文社」

ハワイ「興中会」結成以前の1890年代初頭から、香港・広州・澳門といった珠江三角洲の諸都市において、孫文を初め陸皓東・鄭士良・尤列・楊鶴齡・陳少白・楊衢雲・謝纘泰といった青年集団により、革命への模索が始まっていたことは良く知られている<sup>18</sup>。殊に、1890年頃に孫文・尤列・楊鶴齡・陳少白が屢々革命を談じて、「四大寇」と呼ばれたという逸話は有名である<sup>19</sup>。しかし、これは未だ明確な綱領に基いて政治運動を行なう団体となるには至らず、青年達が天下国家を論じるサロンとも呼ぶべき性格のものにとどまっていたと言える。

むしろ問題とすべきは、楊衢雲・謝纘泰等によって結成された輔仁文社である。この団体の成立に関しては、相矛盾する幾つかの資料が有る。結成者の一人である謝纘泰の回想録は、彼が多くの有望かつ愛国的な青年達と知り合い、「中国の一般民衆を改良し、篡奪者である満州鞑靼人を中国から追放する運動を計画・組織する」ため、劉燕賓の勤める炳記船務公司、楊衢雲の勤める輪船招商局、胡幹芝の乾記船務行、謝纘泰の自宅等で会合を開くようになり、1892年3月13日には「革命本部」を陸敬科等の「硯居クラブ」と同じ棟（百子里第1号）に開設して、標語を「Ducit Amor Patriae（尽心愛国）」と定めると共に、「我々の会合場所を（傍点引用者）『輔仁文社』と名付けた」と述べている<sup>20</sup>。即ち、「輔仁文社」という名称は、1892年の「革命本部」開設に際して初めて採用されたものであるが、組織化の試みはそれ以前に始まっていたということになる。これに対して馮自由は、この団体がまず1890年に発起され、宗旨を「民智を開通し、時事を討論する」と定め、炳記船務公司を「開会地点」としたが、1892年2月15日（旧暦であれば新暦の3月13日に当たる）に初めて「会所」を百子里第1号に開設したもので、政治的な急進性は無かったと記している<sup>21</sup>。また、ある楊衢雲の伝記は、「公（楊衢雲－引用者）は、謝（纘泰－引用者）・劉（燕賓－引用者）等と共に輔仁文社を組織して、知識を交換したり学術を研究する場所とし、その愛国の要素を行なった。」と、政治性に関しては曖昧な記述をしている<sup>22</sup>。この他、「革命本部」の設置を、1890年や1891年とする説も有る<sup>23</sup>。これらの中で最も重視すべきものは、やはり創設者である謝纘泰自身の回想録であろう。

実は、謝纘泰はもう一つの回想録を残している。これは輔仁文社に関して、「謝纘泰・楊衢雲等による、the Foo Yan Man Ser Revolutionary Party（輔仁文社光復会）の組織。会は1891年3月14日（亡清光緒十七年二月初五日）に、正式に設立された。本部は百子里第1号（2階）に、1892年3月13日（亡清光緒十八年二月十五日）に開設された。」と記している<sup>24</sup>。ここで注目すべきなのは、この記述が先の回想録のそれと、以下の3点で異なっていることである。a) 団体の名称が、「輔仁文社光復会」となっていること<sup>25</sup>。即ち、「Revolutionary」という語が用いられ、更に「滅満興漢」の意思を表すとも思われる「光復」の語が、その訳語として当てられていること。b) この名称が、「革命本部」開設以前の1891年に採用されたとしていること。c) やはり「革命本部」開設以前に、この団体が「正式に」設立されたとして、その詳細な日付を記していること、である。a) b) は、

これが謝纘泰自身の著述ではなく、陳春生という第三者の手を経たための訛伝と考えることもできる。しかし、c)は記述の詳細さから判断して、信憑性が高いと思われる。また、もう一つの回想録とも必ずしも矛盾しない。即ち、当初は「四大寇」同様のサロンの性質のものであった彼等の運動が、1891年3月14日の革命団体正式設立によって、恒常的組織化の段階へと進んだと考えて良からう。そうすると、この際に「輔仁文社（光復会）」という名称が採用された可能性も否定できない。つまり、設立当初は集合地点が一定していなかったために、団体自体の名称であった「輔仁文社（光復会）」が、1892年3月13日の「革命本部」開設に伴って、その名称として採用されたと考えられるのである。いずれにせよ、これが興中会よりも早く結成された、中国史上最初の革命団体である可能性は、かなり高いと思われる。

この団体の性格を窺わせる資料に、薛君度氏所蔵の「輔仁文社序」「社綱」が有る<sup>26</sup>。両文書は共に、専ら道徳的己研鑽を説いたものであり、革命運動との関連では、「序」が「危機に瀕している者を助け、困っている者を救う。異姓であっても、どうして同脈と異らうか。」と説いているのが、血縁組織を越えた民族意識を連想させ、また、「社綱」の第6条「愛国者として自らを励まし、我国の被っている屈辱の除去に努める。」が僅かに政治性を帯びているのみである。馮自由の言う急進性の無さは、この両文書に基くものかもしれないが、あるいは、武装蜂起等の具体的実行計画の欠如を指しているとしても、妥当な指摘であろう。謝纘泰も、その様な計画がこの段階で存在したとは述べていない。即ち、革命運動は組織化の段階に進んだとはいえ、依然として実践ではなく言論の領域に限られていたのである。

## (2) 広州「興中会」と香港「興中会」

上述の経緯から次に注目すべき点は、孫文と楊衢雲とが知り合った1891年から広州蜂起の試みられた1895年までの間、両者は各々別個の青年知識人集団の中心となり、ほぼ独自の行動を取っていたことである。陸皓東・鄭士良・尤列・楊鶴齡・陳少白等、孫文と親しかった者は輔仁文社に加入していない。1892年に香港西医書院を卒業して澳門で開業した孫文は、1893年に広州へ移ると、独自に青年知識人達を集めて政治を議論するサロンを形成した。そして、馮自由の著書や楊衢雲の伝記によると、この年に広州の広雅書局抗風軒で孫文・陸皓東・鄭士良・尤列等が集まった際に、孫文が革命団体の組織を提議し、会名を「興中会」、宗旨を「韃虜の駆除、華夏の恢復」とすることで衆議は一致した。但し、この時には具体的な組織化に至らなかったともいう<sup>27</sup>。これは、楊衢雲・謝纘泰による輔仁文社結成が孫文に刺激を与え、それに対して孫文が、独自組織の結成によって自己の主体性を確保することを選んだことを示すものであろう。即ち、この時期の孫文等の活動は、四大寇のサロンの革命言論の段階から、輔仁文社に倣って恒常的革命言論団体の段階へと移行することを試みていたと推測される。あるいは、出身地の惠州付近で会党との連絡に努めていたという鄭士良が、この会議に参加していることから、更に進んで会党を動員した武装蜂起という革命実践を計画していた可能性も有る<sup>28</sup>。尚、この会議に関しては、孫文も含めて参加者自身の証言が全く無い。しかし、それはまさにこの会議が具体的な組織

化には至らず、宗旨・計画に現実性が無かったために過ぎず、やはりこの時に革命実践への移行が試みられたと思われる。なぜなら、前節で述べた様に、まさに革命実践を目的とするハワイ「興中会」という動員客体の組織化に先立って、動員主体自身の組織化が試みられることが無かったとは、考えにくいからである。そして、1894年に李鴻章への上書が失敗し、清朝による改革への最後の希望が絶たれたことによって、孫文の革命実践への決意が確固たるものとなったと考えるべきであろう。尚、会名や宗旨が実際に用いられたか否かを解明することは、現時点では不可能である。但し、翌年のハワイ「興中会」との連続性を考えるならば、その存在を完全に否定することもできないと思われる。

尚、革命実践に際しては両者が提携することの必要性を、孫文も楊衢雲も認識していたものと思われる。かつて孫文を楊衢雲に紹介した尤列から広州「興中会」結成を伝えられ、楊衢雲がこれに賛意を示したという記述は、そのことを示すものであろう<sup>29</sup>。謝纘泰の回想録は、一方は彼が孫文と最初に会った日を、両派が提携した後の1895年3月13日としているが<sup>30</sup>、もう一方には、1890-1891年の輔仁文社に関する記述と1895年の香港興中会に関する記述との間に、「1893-1895 香港における孫文博士と彼の友人達との接触。」と記されており<sup>31</sup>、やはり両者がこの期間に各々の独自性を保ちつつも、提携の道を探っていた可能性を示唆していると考えられる。両派の提携による興中会結成後に初めて孫文と接触したという回想は、やや不自然に思われるのである。但し、その際には組織化の点で一步先んじていた楊衢雲に対抗して、孫文が革命運動における主体性と主導権とを確保するためには、別の「資源」を以て新たな組織を結成することが必要であった。それが、輔仁文社との連合に先立って、孫文が資金収集のためにハワイへ赴いた理由であろう。そして、ハワイで獲得した資金と同志とを背景に、孫文は輔仁文社との提携による、香港「興中会」の結成に臨んだと考えられるのである。

1895年1月末に孫文がハワイから香港へ戻った約1か月後、ストーントン街13号に「乾亨行」名義で興中会が設立され、間も無く第1次広州蜂起の準備が開始されたという経緯に関しては、やはり「興中会」という名称の存在を示す物的証拠は無いとはいえ、馮自由の諸書、陳少白の回想、謝纘泰の回想、楊衢雲の伝記の間に、記述の粗密に差異は有るものの、殆ど矛盾が無い<sup>32</sup>。陸皓東の考案した青天白日旗に関して、謝纘泰も「a white sun on a blue ground」という表現で言及している。また、従来も屢々言及されてきた、「伯理璽大徳」<sup>プレジデント</sup>「總統」'President' 選出を巡る孫文と楊衢雲との対立に関しては、四大寇の一人で孫文と親しかった陳少白の記述と、輔仁文社の中心人物で楊衢雲と親しかった謝纘泰のそれとは、各々の立場から為されたものであるため相矛盾しているが、いずれもこれを革命後の新政府首班としている点は同じである<sup>33</sup>。以上のことから、この時に香港で両集団の提携によって成立した「興中会」が、その発足当初から革命実践、即ち武装蜂起による新政体樹立を目的としていたことは、まず确实だと言えよう。尚、宣誓儀式に関しては、陳少白も謝纘泰も言及しておらず、馮自由の諸書の記述に現れるのみであるが、ハワイ「興中会」との連続性を考慮に入れれば、行なわれた可能性が高いと思われる。

### (3) 社会背景

以上の様に、革命運動を開始する主体となったのは、1890年代初頭の香港に登場した青年集団であった。これら青年達の経歴には、以下の様な共通点がある<sup>34</sup>。

第1の特徴は、彼等が珠江三角洲一帯の村落から香港等の港湾都市を経て、世界各地へと向かう人口移動の中に身を置いており、外部世界との接触によって高揚し始めた、中国人の民族意識を共有していた点である。当時の香港には、中国人はヴィクトリアピーク等の条件の良い地区には居住を許されず、夜間の外出を禁止されるといった差別的状況が存在しており、アロー戦争や清仏戦争の際には、イギリス・フランスに対する大規模な抗議運動や暴動事件が発生している<sup>35</sup>。尚、この点に関しては従来、単に帝国主義列強の圧迫に対する中国人の抵抗として把握されてきたが、アヘン戦争の際の三元里事件や香港新界租借に対する抵抗運動とは、性格が若干異と思われる。即ち、これらの抵抗運動が基本的には、自己の具体的な生活空間たる郷村・宗族への直接的侵害に対する防衛であったのとは違い、その様な郷村・宗族を既に離脱して、外国統治下に新たな移民社会を形成しつつあった香港華人住民は、依然として人口流動性が高く、差別的政策に抗して守るべきは、より抽象的な「民族」としての中国人の地位であった。故に、自らは必ずしも直接的被害者ではない戦争に際しても、自己の個人的・日常的・潜在的な不満を、「民族」の自己同一性の拠り所たる「国家」としての中国への忠誠を示す行動によって、表現したものである。青年知識人達はこのような環境下で、中国の命運に憂慮と危惧とを抱いたのである。即ち、楊衢雲は香港で中国人が外国人に虐げられるのを見る度に強く不満を覚えて種族意識に覚醒し、孫文は清仏戦争の際の暴動に大きな影響を受けたという。陸皓東は蜂起失敗後に逮捕された際に、外国勢力による圧迫を最も懸念していた旨、供述している。また孫文は、当時独立国であったハワイで少年時代を過ごした際に、先に述べたアメリカの拡張主義に対するハワイ人の抵抗運動の高揚に刺激を受けたという<sup>36</sup>。これらの逸話は、彼等が危機に瀕している主体を、「民族-国家」としての中国と捉えていたことを示すものであろう。

第2は、彼等が19世紀後半の香港社会において、イギリス植民地当局と華人民衆との仲介者として抬頭しつつあった華人知識人層に近い経歴、即ち西洋式教育とその知識・技能を生かした職業に就いたことである。この知識人層は、自由放任的なイギリス植民地当局に代わり、華人社会の指導者としての役割を果たしていた<sup>37</sup>。彼等については従来、西洋化した結果としての改良主義的傾向が強調されることが多かったが、むしろその民族主義的側面に着目すべきであろう。即ち、彼等の代表的な人物である伍才（廷芳）・黄勝・何啓・韋玉等は、立法局議員として植民地行政に参加すると同時に、華人民衆の意見を代弁して政庁の政策に反対することもあり、また『中外新報』『華字日報』『循環日報』といった華字紙を創刊して、中国人の立場からの発言を試みているのである<sup>38</sup>。そして、典型的中国知識人としての官僚・郷紳とは異なり、彼等が擁護しようとしたのは、中国伝統の文明や政治・社会体制ではなく、やはり「民族」としての中国人の地位であった。つまり、彼等の知識・思想の源泉である西洋文明自体を否定するのではなく、むしろ「民族」としての中国人がそれを摂取し、「国家」としての中国を改良して、国際的地位を高めるべきことを主張したのである。彼等が洋務派官僚の李鴻章と深い関わりを持ち、先に述べた諸

新聞や何啓の『新政真詮』に代表される様に、中国政治の改良を訴えたのは、こういった民族主義の反映であり、その点で彼等は容閔・嚴復・王韜・鄭觀応等の洋務人材と、ほぼ同じ範疇に属する集団であったと言えよう。無論、先に述べた華人移動人口出身の社会的成功者であったことが、彼等のこのような性格の要因の一つであると思われる。陸皓東・尤列が養蚕業の改良を試み<sup>39</sup>、謝纘泰がアヘン貿易反対を唱え<sup>40</sup>、何啓の直接の弟子である孫文が故郷の翠亨村で様々な改良事業を行ない、また李鴻章への上書等の形で西洋に倣った教育・産業の近代化を説いたのも、この香港知識人層の改良主義的民族主義の影響によるものと言えよう。

第3は、彼等がその民族思想の源流・祖型として見出したのが、三合会等の秘密会党に受け継がれ、太平天国によって盛んに唱えられた「滅満興漢」の宗旨であり、洪秀全が彼等の偶像的存在とすらなったことである。秘密会党は、清朝中期以降の大規模な社会変動・人口移動が進行する中で、土地と宗族から切り離された大量の流民・失業者を吸収し、相互扶助組織として急成長した。そして、明末清初の反清抵抗運動に関する半ば空想的・神話的な起源説話をもち、「反清復明」「滅満興漢」といった種族復仇主義的宗旨を掲げることによって、その活動に一定の大義名分—政治的意義を付与していた。即ち、やはり移動人口であるがゆえにこそ、抽象的な「民族」に自己同一性の根拠を求めたのである。広東省は、これらの反体制組織の勢力基盤となっていた地域であり、また人口流動性の高い当時の香港下層社会では、秘密会党が互助組織として一定の勢力を持っており、先に述べた暴動にも三合会がある程度は関係していたと考えられる<sup>41</sup>。青年知識人達の内、鄭士良・尤列・謝纘泰は三合会員であり、孫文も幼い頃に故郷で太平天国の遺老から故事を聞いたり、三合会の武術訓練を見たりしている。無論、列強勢力の伸長という新時代の潮流を実感することによって覚醒した彼等の民族意識と、単純に明朝を滅ぼした満州人への反抗を唱えるこれら秘密結社の「反清復明」の宗旨とは、決して同質のものではない。そして、従来の研究においても、孫文達において対列強民族主義がなぜ反満民族主義と結び付いたのかは、必ずしも明確にされてこなかった。しかし、既述の通り、王朝の統治機構からも郷村の宗族組織からも比較的自由であった彼等の民族意識は、危機への対応を迫られている主体を、王朝体制として把握した洋務派官僚や、あるいは郷村世界として認識した民衆運動とは異なり、それをあくまでも中国人という「民族」として捉えたのであり、その点で満州王朝に対する漢民族の反抗を唱える会党の、移動人口特有の民族主義に通じるものだったのである。

以上の様に彼等は、中国の伝統的な国家体制・社会組織を離脱した移動人口が形成する、当時の香港華人社会に属していた。それ故に、外国との接触を通じて民族的自意識に覚醒し、列強による圧迫という現状が、「民族」としての中国人が西洋人に比して文明的に遅れていることに起因し、更にそれは「国家」としての中国が、異民族支配のために正常な発展を阻害されていることによると考えたのである。ハワイ・香港の「興中会章程」は、まさにその様な危機意識を表すものであろう。故に、孫文の李鴻章への上書の様に、若干の振幅や偏差は有ったものの、彼等は概ね既存体制内での改革よりも、民族革命による体制の変更を求め、中国人による「民族国家」を建設することを通じて、中国の国際的地位

を向上させるという、全く新しい性質の政治運動—革命運動を開始することになったのである<sup>12</sup>。

おわりに

以上の様に、現時点では依然として、興中会という組織の成立時点・地点を完全に確定することは、資料不足のために不可能であるが、現段階で考え得る運動発生の「過程」と興中会の「成立」の経緯を時系列的に整理すると、以下の様になる。

\*1890年代初頭の香港に、民族革命を志向する青年群が登場し、同学・同郷等の関係を通じて、サロンの革命言論集団を形成した。それは概ね、孫文を中心とするものと楊衢雲を中心とするものとに分かれていた。

\*楊衢雲を中心とする集団が、最初の恒常的革命言論団体である輔仁文社を1891年3月14日に結成し、翌年3月13日には常設の集合地点を定めた。

\*輔仁文社に刺激を受けた孫文等は、1893年に広州で独自の恒常的革命団体を結成して、言論の段階から実践の段階へと移行することを試みた。「興中会」という名称や、「韃虜の駆除、華夏の恢復」という宗旨は、この時に定められた可能性が有る。動員主体による組織化の試みの開始という意味では、これが興中会の起源であると思われる。

\*両派の提携による実践への移行を模索する孫文は、楊衢雲に対する優位性を得るために、1894年にハワイへ資金収集に赴いて興中会を結成し、宗旨を「韃虜を駆除し、中華（国）を恢復し、合衆政府を創立する」と定め、政治化しつつあった一部華僑の支持を得た。動員客体をも含んだ組織の形式的成立という意味では、これが興中会の起源であろう。

\*孫文がハワイから香港へ戻ると、1895年2月に両派の提携によって香港興中会が結成され、革命実践としての広州蜂起の準備が始められた。しかし、まず新政府首班の選出を巡って顕在化した両派の対立は、数年間にわたって続いた。

総じて言えば、清代中期以降の大規模な社会変動に伴う広東人の人口移動の結果、1890年代初頭の香港において、革命により漢民族の共和国家を樹立することを企図する、新たな民族主義運動が発生したのが〈孫文革命〉の「起源」であった。そして、孫文派の革命運動は以後、辛亥革命に至るまで一貫してこの性格を持ち続けたのである。